

清末戊戌維新期の中国における

## 女子教育振興論と中国女学堂の創設

李 協 京

一、中国においては、一九世紀の末期、改良主義的な思想をもった知識人、特に維新派のリーダーたちが、西欧や日本の経験に習い、中国の富強のために、人口の半数を占める女子の力を動員しなければならいとして、女性解放を唱えた。その手段とされたのが、女子が学ぶこと、即ち女子教育、また纏足の陋習を廃して女性の身体的解放を実現することの二つである。特に前者の女子教育に関して、当時どのような議論が展開され、またそうした議論が中国の近代女子教育の創立に実際どのような影響を与えたか、これらの問題を検討することが本研究の目的である。対象となる時期は、女子教育振興論が高まり、しかも最初の中国人自営女子学校が誕生した一八九八年前後の戊戌維新时期である。

二、女子教育を唱えた代表的な論議には、一八九一年宋恕の『六齋卑議』・「変通篇・開化章第四」、一八九二年鄭観応の『盛世危言・女教』、一八九六年陳熾の『庸書・婦学』、そして一八九六年梁啓超の「女学を論ず」(『時務報』)などが挙げられる。この中でも特に梁啓超の「女学を論ず」が女子教育の重要性を述べた。

第一、民富国強の「大治」に達するために、「必ず人々に各自職業を持ち、自分を養うことができるようにさせる」、女子が職業を持たなくて自分を養えず男子に寄食すれば、「利益を生む人

(生利之人)にはならず、ただ「利益を分ける人(分利之人)」になると論じている。第二、女子が学ばないなら、「天地の間の事物に対して、一つも聞かず、終身の精神を尽して家庭内に揉め事を起こし、またそのような陋習は学ばなくても皆身についてしまい、約束しなくても皆同じようになってしまふのである」と言い、これは男子に対しても不利な影響があると指摘している。第三、「天下を治める大本は二つ。人心を正し、人材を広めることである。しかし二者の本は幼児教育に始まり、幼児教育の本は母による教育に始まり、母による教育の本は婦人が学ぶことに始まる、故に婦学は実に天下存亡強弱の大本である」と主張している。第四、種族進化的角度から、婦学が「胎教の道」において重要な意義を持つと論述した。

思想啓蒙家と維新運動のリーダーとして、梁啓超の思想言論は当時多大な影響力を持っていた。彼が女学に対する積極的な提唱も女子教育を重視し、女子学校を創設するブームを巻き起こした。最初の中国人自営女子学校——上海の中国女学堂(経正女学堂ともいう)もその言論の影響を受けて設立されたものである。中国女学堂の創設者経元善が次のように言っている。「新会梁卓如孝廉の時務報第二十三、二十五冊に載った女学論は、人になかった発言がみられ、読者は皆その緻密さと透徹さに感服している、上海女子学堂設立の源は実はこの筆に発せられた」。実際、梁啓超は宣伝だけでなく、中国女学堂の企画と準備の仕事にも直接参与した。『創設女学堂啓』及び『上海新設中国女学堂章程』はいずれも梁啓超の筆によるものである。経元善は次のように梁啓超を賞賛している。「且つ公啓の執筆、章程の起草、寄付の呼びかけは、皆孝廉の大家の筆に出るもので、文理は緻密で洞察力に富み、

学問に本原があるだけでなく、また嶺海のように多才を見せており、益々深く仰ぎ敬っている。<sup>①</sup>

三、有識者たちが女学を提唱したのは、一つには抑圧された女性への同情、もう一つには伝統的な女性観をもって富国強兵における女子の重要な役割に対する重視によるものである。国家と民族が危機に面した時、彼らが考えたことはまさにこの危機を乗り切つて国を救うか、ということであつた。この目標を達成するために彼らは、伝統を批判するのではなくて、むしろ「夫を相け、子を教える」（相夫教子）といった従来の女性の役割を強調した上で良妻賢母主義的な女子教育観を提唱したのである。

例えば、梁啓超は「倡設女学堂啓」の冒頭文で、「上は夫を相け、下は子供を教え、近くは家を宜しくし、遠くは種を善くする。婦道は既に昌えれば、千室は良善となる。なかなか善いことではなからうか？」と書いている。また、経元善は中国女学堂創設のために一八九七年政府官僚に書簡を呈して経費の援助を申請したが、その文書で次のように述べている。「我が中国が自強を欲すれば、広く学校を興じるより急ぐことはない、しかし学校の本源の本源は、女学を興じるより急ぐことはない。人間は胚胎成形のときから、母による胎教を受け継いでいる。子供の頃から、母による教育に頼り、飲食教誨、至る処皆学問に関わっている。昔の偉人の中で、賢母の教を得て世間に名を揚げた者については、史書を一々枚挙することはできない。婦女に大義を知つてもらうことを欲すれば、先ず女学を興さざるを得ないことが明らかである。私が泰西各国の教養の道を考察して百点にすれば、母による母教は胎児の頃から始まるので七十一点を得、友達による友教は二十点、教師による師教は九点しか得ていない。」<sup>②</sup>このように彼は、

「母教」（母による教育）の重要性という観点から女子教育を主張したのである。

四、女学振興は維新運動の重要な一環として登場したものである。しかし、清政府を通じて政令を發布した康梁の政治改革と違って、女子学校の創建者たちは、一方では清政府の官員に上書して、行政的及び財政的な支持を勝ち取るうとし、もう一方では民間で募金活動を発動して、しかもこれを主な財源に最初の女子学校を創立した。彼らは政府の支持を勝ち取るうとする同時に、民間の力を頼りにまず局部で女子学校を創建して、風紀打開の先駆的な役割を果たした。中国女学堂の創建者経元善が「総署及び各督撫大憲に上申する書」の中で言ったとおりである。「小官元善らはこのことに深く鑑み、内地で広く女学を興したいが、人情を考慮すれば始めにくい、惟上海が通商して既に長く経つており、次第に西法に習っているので、上海で先ず一軒総校を設けて、風紀打開の先行にし、徐々に広まることを図っていく。」<sup>③</sup>

こうして維新派のリーダー梁啓超を代表とする進歩的な知識人の女子教育振興論は、思想上の準備として女性解放運動の前奏となり、また直接最初の中国人自営女子学校創設のために輿論上の宣伝をした。彼らの主張に共鳴した上海の紳士経元善らが女子教育振興の理想を実践に移し、一八九八年の春、上海で中国人自営の最初の近代的女子学校——中国女学堂（経正女学堂ともいう）は創設された。この女子学校の創立過程に関しては、今後の機会を検討するつもりである。

① 『経元善集』p. 210。

② 『中国近代学制史料』一・下 p. 880。

③ 『中国近代学制史料』一・下 p. 890。